

～新着資料の紹介～

たぐち しょうほ
田口松圃



本名は、田口謙蔵。

明治16年2月6日に、大曲の素封家田口惣左衛門家そほうかに生まれました(米治の二男)。
人より2年早く小学校に入学するなど勉学で抜きん出ていたほか、書画にも才能を発揮し、神童とも言われていたそうです。

明治35(1902)年3月に県立秋田中学を卒業。東京専門学校(現在の早稲田大学)政治経済科に進学しましたが、祖父岩蔵の意向に反して文学へ傾倒し大学を中退しました。そして、故郷大曲へ戻り、この頃に邦子(佐野八五郎の娘)と結婚しました。

その後は、仙北新報社の2代目社長や2期8年間大曲町長を務めたり、古四王神社の改修や払田柵を発掘したり、政治や文化だけでなく、文化財保護にも尽力しました。

明治39年から死の直前まで書かれた日記は、明治から昭和の政治・文化の様相を描いた貴重な資料となっております。

資料は大曲図書館にご遺族から寄贈いただいたもので、令和2年に大仙市アーカイブズへ引き継がれました。

～田口松圃と仙北・大曲年表～

和暦	月日	出来事	和暦	月日	出来事
明治 16	2月6日	田口松圃(謙蔵)誕生	大正 3	3月15日	強首地震
明治 22	4月17日	市制町村制施行により大曲村誕生	大正 7		松圃が仙北新報社(現秋田民報社) 2代目社長に就任
明治 24	7月9日	大曲町制施行	大正 13	11月28日	田口岩蔵碑建立
明治 29	4月	松圃、秋田中学校に入学	大正 14	4月14日	松圃が大曲町長に就任 2期務める
"	7月6日	農商務省農事試験場陸羽支場を花館村に設置	昭和 4	10月10日	榊田清兵衛死去
明治 35		松圃、東京専門学校へ入学	昭和 6	10月8日	古四王神社改装築竣工式
"	9月25日	仙北郡図書館開館(大曲図書館)	昭和 7		松圃が大曲図書館館長に就任 榊田清兵衛翁碑除幕式
明治 37	12月	大曲駅開業 この頃に松圃は邦子と結婚か…?	昭和 11	2月7日	ブルーノ・タウト大曲の綱引きを見物
明治 39	4月4日	まる古吟社結成 俳誌「まるこ川」創刊	昭和 12	7月	松圃が県議会議員に就任
明治 40	7月25日	<small>かわひがしへきごとう</small> 河東碧梧桐(作家)大曲訪問	昭和 25	8月29日	古四王神社本殿重要文化財指定
"	9月15日	文芸誌「白虹」第1号発行	昭和 26	7月26日	大曲小史発行 (町制六十周年記念)
明治 41	4月19日	裁判所移転問題に伴う町民大運動会・ 川上邸焼討事件	昭和 29	5月3日	大曲市誕生 (大曲町・花館村・内小友村・ 大川西根村・藤木村・四ツ屋村)
"	4月23日	<small>こしおうじんじよ</small> 舌西王神社本殿が特別保護建造物に指定	昭和 30	4月1日	角間川町合併
"	8月14日	第4回全県俳句大会を大曲町にて初開催	昭和 31	1月16日	田口松圃死去 大曲市初の文化葬
明治 42	4月29日	松圃分家			
"	10月7日	祖父 岩蔵死去			
明治 43	5月17日	高浜虚子が平福百穂と秋田を訪問			
"	8月25～27日	第1回奥羽六県煙火共進会開催 (現全国花火競技大会)			

エピソード:その1

松園が幼い頃、祖父の岩蔵がその非凡な才能を見抜き、満3歳の時から大道政治郎という人物をつけて勉強させた。その熱心な教育が松園の才能を伸ばし、通常より2年早く大曲小学校に入学する。成績も抜群で神童といわれた。

日本画にも秀で、秋田伝神画会が全国から作品を募集した明治24(1891)年の展覧会では、審査員の鈴木百年、菅原白龍を驚嘆させた二人の少年のうち一人が8才の松園であり、もう一人は14才の平福百穂だった。しかし、松園を田口家の跡継ぎにしたい祖父岩蔵が、後に絵を描くことを禁じたため、この才能を伸ばすことはできなかった。

松園は、文芸にも天分を発揮し、13才で秋田中学に入ると菅礼之助、池田謙三、滝田哲太郎(樗陰)らと級友雑誌委員となり、俳句にも頭角を現した。その後、東京専門学校(のち早稲田大学に改称)政治経済科に入るが、文学にあこがれる松園は、文科の坪内逍遙の講義に熱中した。そのことを案じた祖父岩蔵により、大学を中退させられている。



松園が6歳9か月の頃の作品

エピソード: その2

松圃と邦子夫人は昭和 29(1954)年末に金婚式を迎えた。そこから逆算すると、明治 37(1904)年末頃に結婚したことになる。邦子は秋田市通町の佐野八五郎の娘で、日記でわかる限り、二人の間には六男四女が生まれた。

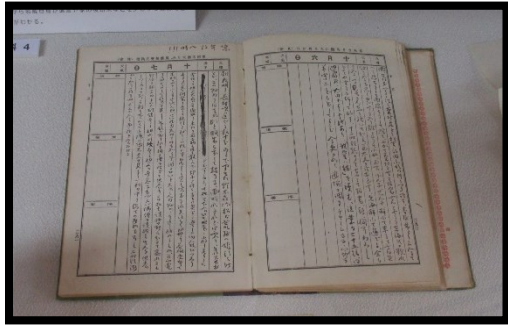
昭和 4(1929)年に銀婚式記念で京都・奈良へ行った二人旅行の際には、奈良で春日神社参拝中に銅燈籠や大仏殿の説明をしたり、お昼に奈良茶漬けを食べて博物館まで散策したり、奈良公園を散歩したりしている。旅行記の写真はその時のもの。

昭和 15(1940)年の娘みつ子の結婚式の際には、伊豆での結婚式の前に三人で東京に寄り、三越でみつ子の新生活のための買い物をしたりしながら、最後の家族の時間を過ごしている。

晩年まで、邦子夫人はよく松圃の日記に登場するが、その中で二人はよく茶話したり、寝る前に談話したりなど仲の良い様子が目に浮かぶ。



～展示資料の紹介～



日記(明治 42 年)

10月7日に祖父岩蔵が死去した際の日記。日記を読むと数か月前から岩蔵自身が遺言や家の後始末などを少しずつ進めてきたのがわかる。

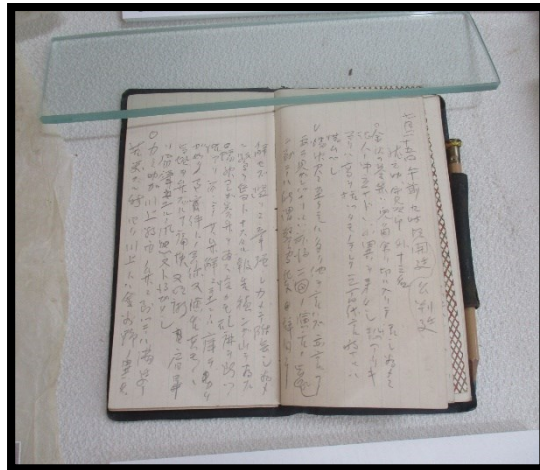


写真帖(明治 43～大正 3 年)

松園が撮影した家族写真や大曲の人々の様子、文化財などのアルバム。このなかに、鞠水館の前で撮影された松園の写真やビリヤードを楽しむ様子が残されている。

手帳(明治 41 年頃)

明治 41 年 4 月に起こった川上弁護士邸焼討事件の顛末がメモされている手帳。事件当日の様子のほか、後日の取り調べ、裁判の様子も日記調にメモされている。そのほか、まる古吟社の活動記録についても記されている。

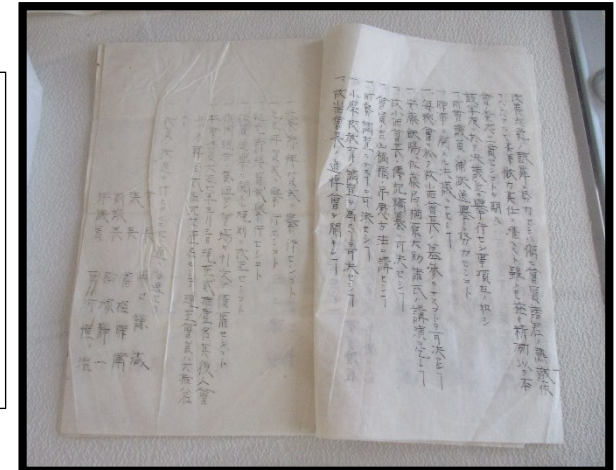


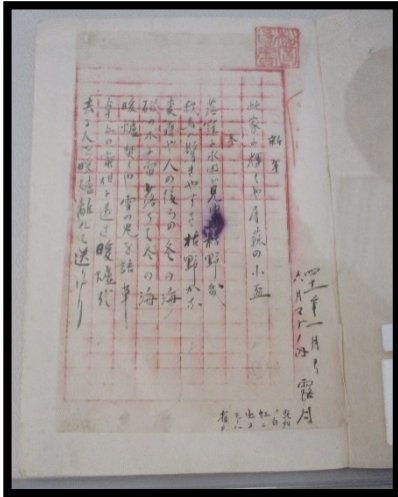
江東義会

大正七年度会事報告・大正七年度会計報告・大正八年四月三日現在

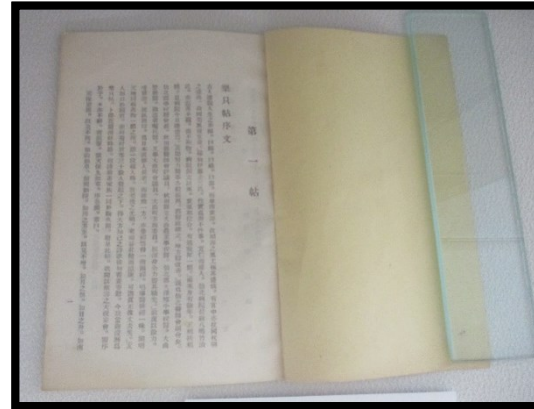
基本金調(大正 8 年)

江東義会の報告資料。



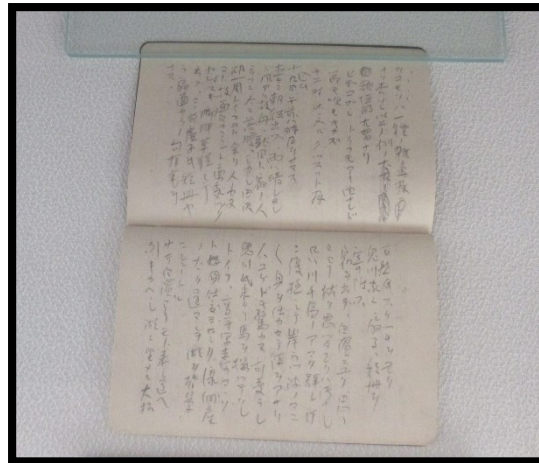


全県俳句大会 句稿
主催まる古吟社
(明治41年8月14日)
 大川寺で行われた全県俳句大会の俳句原稿。露月の俳句も多く掲載されている。

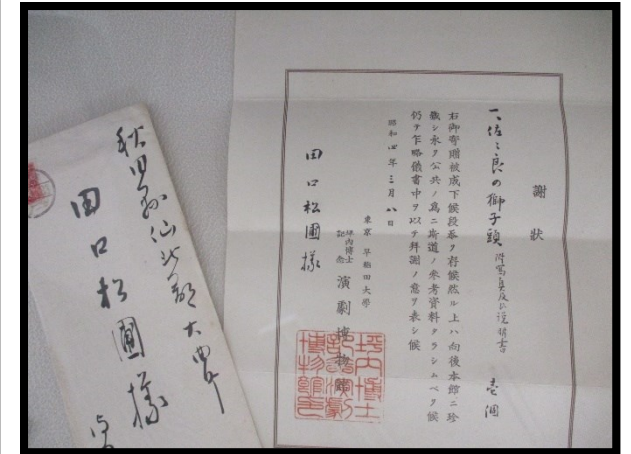


楽只帖(昭和11年)
 秋田坊(伊藤圭三)の還暦記念会で作成した句集。

書簡(昭和4年3月8日)
 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館に、松園が太田町の横沢ささらの獅子頭を寄贈したことで送られた感謝状。



手紙
(明治43年5月17日～)
 虚子と平福百穂が来県し、秋田、田沢湖、大曲などを旅行した際のこと書かれている手記。手帳後半には松園が詠んだと思われる俳句のメモも残されている。



虚子の秋田旅行に同行

明治43(1910)年5月17日に虚子は秋田に来県し、田沢湖、秋田などを旅行した。田沢湖に向かった18日は雨が酷く、松園は「お盆をひっくり返したかのような雨」と例えている。そのため、その日は田沢湖春山の鬼川氏という人物の家に一泊し、19日に湖へと向かった。湖畔では記念撮影や、ビールを楽しんだと日記にある。

秋田市では、虚子が日本海を初めて見たと喜び、その後一行は女米木にいた石井露月を訪ねている。松園の日記では、虚子と露月が久しぶりに会い、親し気な会話をしているのが分かる。秋田では能代階楽社や秋田木材会社という会社を訪ねている。

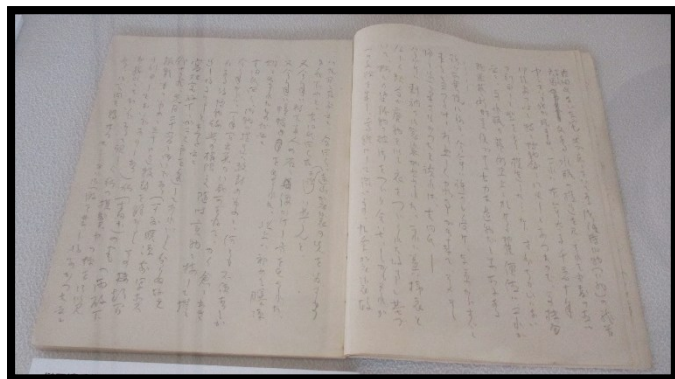
23日に車でそれぞれ帰宅し、松園は大曲で下車している。日記を見ると虚子に再会を約束し、野菜を一籠送っている。



仙北新報

(昭和 13 年 6 月 1 日付)

大沢牛沼の貯水池竣工式、第 2 回仙北郡内青年弁論大会について大きく取り上げられている。



榊田清兵衛記念会用ニテ四度内藤博士訪問記

赤川菊村同行(昭和 6 年)

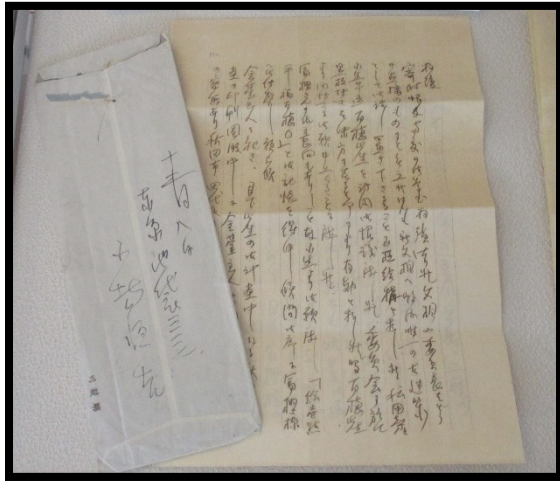
榊田清兵衛翁碑文の撰文を依頼しており、その原稿を受け取りに 11 月～12 月にかけて内藤湖南を訪問した際の日記。赤川菊村は湖南と懇意であり、そのため松園と同行したと思われる。

松園の執筆活動と仙北新報

大曲で新聞が発行されたのは、「大曲商報」がはじまりである。榊田繁治、藤田金治が発刊したもので、大曲の米穀取引所の機関紙でもあった。

日露戦争が勃発すると、小西平洲の説得により号外として「仙北新報」を発行して戦況を伝え、明治 41(1908)年 2 月に改題した。その編集室は、当時大曲の文化サロンであり情報拠点であった枕流館の六番室におかれた。松園は随筆を書き、ほかに富樫蟠神らが執筆、赤川菊村が実地に取材した記事を書いて編集にあたった。小西平洲が初代社長で、松園は大正 7(1918)年に 2 代目に就任し、休刊までその職を務めた。松園の随筆は、終戦後改題した秋田民報や秋田魁新報、雑誌等にも数多く発表されている。

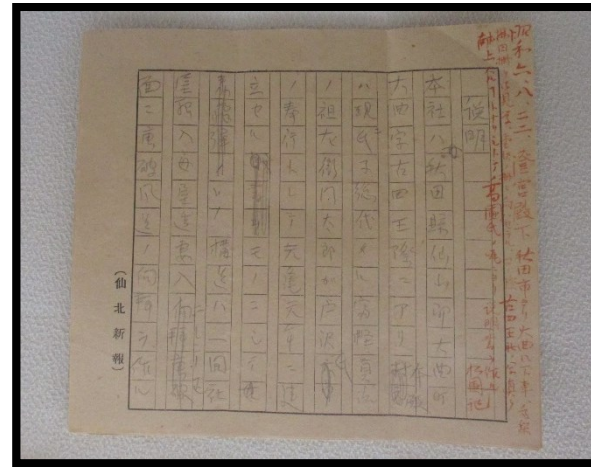
仙北新報は昭和 17(1942)年 6 月、戦時統制令により休刊し、昭和 20(1945)年 11 月に秋田民報と改題して復刊した。なお、明治 43(1909)年に大曲の全国花火競技大会のはじまりである「第 1 回奥羽六県煙火共進会」を主催したのも仙北新報社である。



書簡

(昭和4年12月18日)

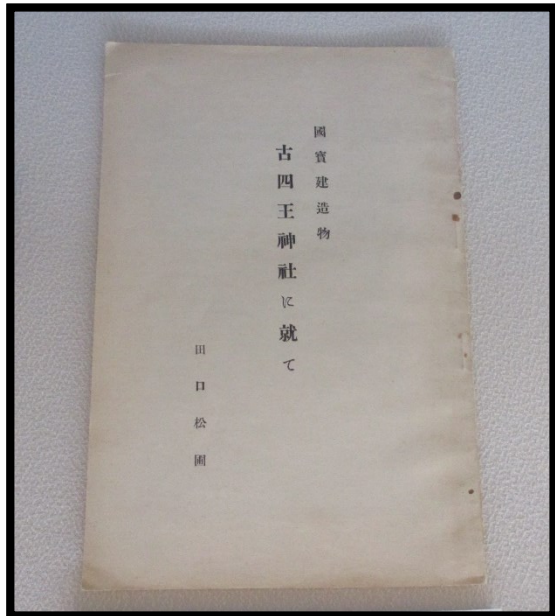
小場恒吉から松圃に宛てた古四王神社改修に関する手紙。文部大臣が委員会にかけることについて通知があったことを意外だと述べている。



説明

(昭和6年8月22日)

古四王神社について澄宮殿下への説明原稿。



国宝建造物

古四王神社に就いて

(昭和)

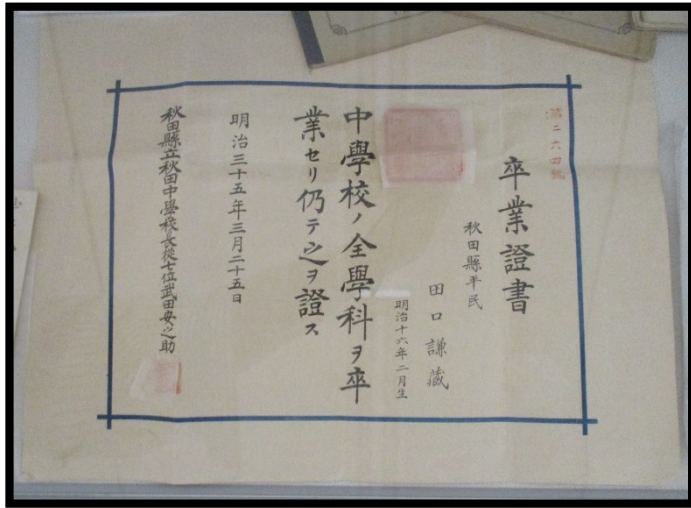
大曲町郷土史の付録として松圃が執筆した古四王神社に関する論文。創建から改修までの内容をまとめたもの。

古四王神社の改修

戦前、国宝に指定されていた古四王神社は、その建築手法が「豪放磊落、絵様彫刻絶妙」であることから、旧国宝指定当時の専門学者をして「珍中の珍、奇中の奇」と絶賛された。松圃の尽力と秋田市出身の小場恒吉(東京美術大学助教授)の奔走により、文部省から修理工事認可と補助金交付を受けて行った昭和5(1930)年の解体修理の際、組物の中から「古川村 大工 甚兵衛」の墨書が見つかった。

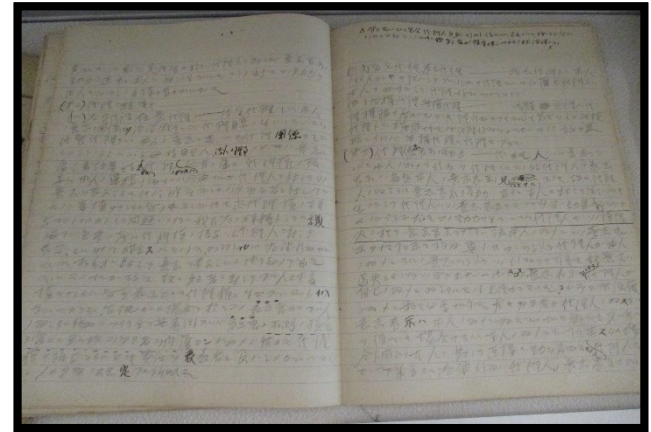
松圃は岐阜県吉城郡の古川町長に手紙を書いて調査を依頼し、古四王神社は、飛騨の匠甚兵衛の作であることが判明する。翌年、松圃が『秋田考古会々誌』に書いた「国宝建造物古四王神社に就いて」により、古四王神社は国宝として多くの人々に知られることとなった。

古四王神社の本殿は現在、国指定重要文化財(建造物)に指定されている。



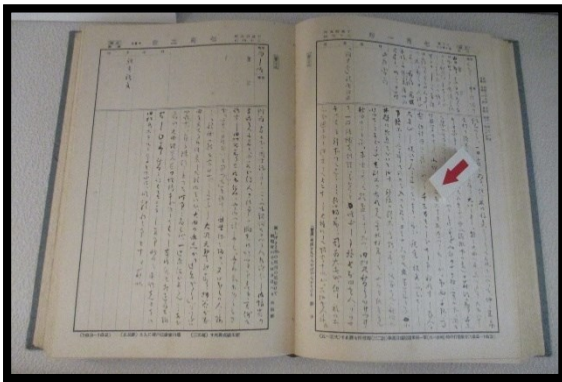
卒業証書(明治 35 年 3 月 25 日)

秋田県立秋田中学校卒業した際の卒業証書。



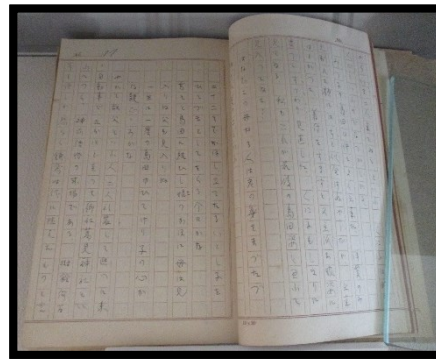
ノート(明治 35~6 年頃)

東京専門学校(早稲田大学)時代の授業ノート。政治経済科に入学したが、のちに文科の坪内逍遙に師事した。授業ノートを細かく取っていることがわかる。



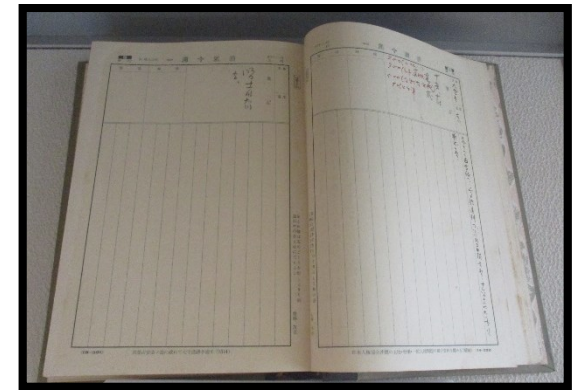
日記(昭和 12 年)

松園は県議会議員出馬を打診されて立候補し、6月29日に投票。7月1日に当選が確定した。



日記(昭和15年)

娘みつ子の結婚式のため伊豆へ旅行した時の日記。行きは松園・邦子・みつ子の三人で東京に寄って買い物などをしている。みつ子の結婚式の様子を詳細に綴っている。小沢久夫と結婚。



日記(昭和 31 年)

松園最後の日記。死去する2日前の14日の日記が途中になっている。2月頃まで予定がすでに書かれていた。

～大曲町長就任の経緯～

※基礎資料は大正14年の松圃日記「」は日記引用文

大正14年

1月	16日	中里仙北郡長から松圃へ打診「余に、町長を承諾せよと説く」
	17日	「町長問題は目下、非常にデリケートな又複雑な関係にある」
	18日	「中里郡長より話の町長問題につき内談」
	23日	「板谷氏に電話をかけ、中里郡長の大曲町長問題に対する内意を伝え」
2月	6日	「榊田憲蔵君来り、町長問題、町議改選問題、大曲青年会長問題、青年団長問題等を話して去る」
	13日	「町長就任問題に就き話合ふ(中略)ただ残りは余が町長就任の可否のみ」
	14日	「町長就任の事は父中々承諾なき故、有給助役専任は余の就任を条件ならば、中止され度、誰がなるにしても目下町政運用上の必用(ママ)とすれば＝余個人としては必要と思ふ＝進行されたし」
3月	21日	「新町長問題に対するカネ吉氏の意見をきく、これまでの助役問題の経緯を話す」
4月	9日	松圃、町長就任を内諾する「倶楽部に行く、(中略)余、榊田氏を迎へて町議の事、町長、助役問題、藤田町長問題を一致解決す、高垣氏に助役、余に名誉町長の交渉あり、承諾、榊田氏は明朝、父上に此事の許可を得る為め来ることにして散会」
	10日	「榊清氏を中心の集会の内容を話す、且つ余を名誉町長に推されし経路を言上」
	14日	松圃、町長に当選「午後二時榊しげ老と町会に行く、名誉職長町長に余当選(会者十五、一四票、余の一票は板谷にいれる)外一件議了」
	17日	「長谷山君、町長認可の通知をもちて来り」
	18日	「前町長藤田老人在職中のアイサツに来る、(中略)午後二時町会に行き、始めて町長として開会」
5月	4日	「余は実務を執る町長にてもなし、自然毎日の出勤の助役以下にはかりて返答すべしと答ふ」